Christa Wolf の『原発事故』

中　川　勇　治

1986年6月から9月にかけて約3カ月，東ドイツ（当時）の女流作家Christa Wolf (1929年生まれ) は，その年の4月26日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の事故（以下，原発事故と省略する）を題材として一つの作品を生み出すべく努力した。その結果は翌年Aufbau社から出版され，さらにその年のうちに西ドイツ（当時）の出版社Luchterhandから叢書の一つ(SL 777) として翻刻された。題名が『原発事故』とされたこの作品は，ジャンルをきめかねるような言語構成物で，文学テクストとでも呼ぶ以外に名付けようがない。

まず，原発事故が起こって1カ月ほどで執筆に取り掛り，3カ月で仕上げたというWolfの付記が事実なら，彼女が本来どれほど速筆の作家であろうと，この作品は異常に速く完成させられたものである。従ってこの事実から，まず彼女が素材となるチェルノブイリ原発事故に，おそらく，実に強烈な衝撃を受け，それを遮二無二文学的表現にしたいと願ったこと，次いで，その表現を小説とか，戯曲とか，あるいは映画シナリオとかの形式に封じ込めるための心の余裕がなかったことなどが推測される。それでも形式のことを問題にするならば，結局，この作品は事故の起こった「あの日」を，主人公として設定された初老の女流作家の一日の暮しの記録（主人公の感情の動き，想念の飛躍，思考のうねりなどがルティーンの時間軸に沿って展開される）として反映しているのであるから，それも読者を意識するというより，主人公の心理の忠実な再現をめざしているようであるから，日記の一種と見做せるであろう。

チェルノブイリ原発事故が素材として（素材というには圧倒的な重みをもつ現実ではあるが）Wolfの強い関心を惹いた事情は，彼女が1983年に発表

した „Kassandra“ のテーマを想い出すだけで容易に理解できる。一族の滅亡を悟って，それを予言した霊媒カサンドラは，その予言が聞き入れられない定めにある。これは文学による現実の洞察あるいは透視が，今やあまりにも巨大な現実によって圧し潰されかねない窮地に陥ったことと同断であろう。巨大な現実の圧迫，威嚇とは，この前作の場合，核戦争による地球の荒廃，そして人類の滅亡を意味していた。従って，Wolf が「原子力平和利用」の歴史における最悪の大災害に直面して，その体験を自分の言葉で語ろうとする強い欲求に駆られたことは当然であろう。

チェルノブイリ原発事故は，私的な生活圏の内部で処理し，過去の歴史的事象としてまつりあげることの出来ない公的な事件で，現在も未だその影響が見られ，いわば，汎地球的規模で，人類全体に関係する現実の問題を形成している。いったい，このように巨大な現実を，ついには自我という砦を離れることのできぬ文学者がどのようにして（そのジャンルが何であれ）一つの作品の中に封じ込めることができるのか。そもそもその方法は存在するのか。Wolf はいかなる道を辿って，自分を聳動させた現実の文学作品化を試みたのであろうか。テクストを足掛りにその努力の跡を追ってみたい。その追跡に入る前に，チェルノブイリ原発事故の概要を想い出しておこう。つまり，現実の大きさを確認しておく必要がある。

参考文献によれば①，1986年4月26日午前1時23分，当時のソヴィエト連邦ウクライナ共和国の首都キエフから北方へ約130キロメートルの地点にあるチェルノブイリ原子力発電所で，第4号炉が二度にわたって爆発した。このため原子炉を格納している建築物の屋根が吹き飛び，中空となった個所から大きな火の塊が出現した。続いて猛烈な火災が発生，炉心の中の放射性物質が3～4パーセント大気中に放出され，やがて気流にのって拡散した。当該原子炉は，RBMK-Reaktor（黒鉛減速軽水冷却炉沸騰水型）と呼ばれる

① 参考文献A，B，C，D，E，F

ソ連独自の設計，建設によるもので，電気出力は100万キロワット。核分裂反応の減速剤が，西欧諸国の原子炉と違い，水ではなく黒鉛を用いるタイプであったが，この時，その黒鉛が炉心内の異常高温のために燃焼したのである。元来，黒鉛はきわめて燃焼しにくい物質だが，一旦燃え始めると，今度はまことに消えにくい。このため炉心内の消火活動が困難をきわめ，砂，鉛その他の消火材料をヘリコプターで投入する作業もなかなか進捗しなかった。完全に消火するまでに12日間かかり，多くの消防隊員が生命を失なった。

さて事故の原因は，この年の8月14日にソ連政府が国際原子力機関(International Atomic Energy Agency. 略称：IAEA）へ提出した第1回目の事故報告書によると，蒸気タービンの慣性運転の実験中に各種の安全装置が残らず切られたことであった。この安全装置の一つがもともと原子炉を自動停止させるシステムであったため，炉が停止せず炉心内の熱が異常に蓄積され，結果として手の施しようのない連鎖反応が起こり，出力が急上昇し，やがて爆発し，火災が発生した。つまりは，一連の不幸な人為的ミスに帰着する事故であった。

人命の犠牲は，発表時期によって数値に変化があるが，まず爆発時に原子力発電所の職員2名が即死，その後，消火活動中の放射線被曝により1987年5月末までに31名が死亡している。

また炉の爆発後に放出された放射能は，最高時に200万キュリー，また炉の火災が続いた全期間中のそれは，計5,000万キュリーであった。後者は，1945年広島に投下された原子爆弾のそれの30倍から40倍に達したことになる。

放射線被曝による人命の危険が迫り，事故現場周辺の住民が強制的に疎開させられた。4月27日にまず45,000人，さらに一週間以内に現場より30キロメートル圏内に住む人々90,000人が緊急避難を余儀なくされた。結局，チェルノブイリ周辺の179町村（開拓地も含む）が疎開によって無人となった。

さらに，原子炉爆発の際，強い放射線を浴びて放射線障害にかかり，入院

治療が必要となった周辺住民は500名以上にのぼっている。被曝により今後癌で死亡すると推定される人々の数は,学者間でも一致した見積りはないが,支配的な見解では，世界全体で数千人と予想されている。ただし，直接チェルノブイリ放射線被曝者の治療に従事したアメリカ医者R.P.ゲイルは，この癌死亡者の数を，今後50年間に50,000人と見ている②。それに，被曝者の次の世代に出生欠損，遺伝的異常が発生する危惧がある。

この原発事故はその影響が事故を起こした当事国にとどまらず，国境を越えて主としてヨーロッパ諸国であるが，他の国々にも及んだ最初の（願わくは最後の）例である。爆発が起こったときの気象状況によって（風は北東のスカンジナビア方向に吹いていた)放射性物質を含む雲は，まずポーランド，スカンジナビア諸国へ拡散し，次いで程なく中部ヨーロッパの広範な地域に達した。なおチェルノブイリの大惨事が世界中に報道されたきっかけは，ソ連当局の発表ではなく，事故の二日後にスウェーデンで異常に高い数値の放射能が検出されたことであった。放射性物質の分析結果，原子炉にしかない核分裂の生成物セシウム134が認められたのである。世界は事故発生の三日後になってようやくこの凶報に接した。東欧諸国，スカンジナビア諸国そして中部ヨーロッパの諸国では農産物の放射能汚染，自然環境の破壊が起こり社会的不安が醸成された。原発事故はもはや一国の問題ではなく，汎地球的な,人類の生存にかかわる深刻な脅威的事件となったのである。米国カリフォルニア州ローレンスリバーモア国立研究所の観測するところでは，チェルノブイリの惨事が大気中に放出した放射能は，これまで世界中で爆発したすべての核兵器（実験も含めて）から生じた放射能総量の三分の一に当たり，今後長期的に大気圏を汚染しつづけるという。

なお，チェルノブイリの放射能汚染について，1994年現在の状況を見る

---

② A．下巻144ページ

と[3]，事故後，136,000人が強制疎開させられたが，大気中に放出された放射性物質の四分の三が降下した白ロシヤでは，今日もなお200万人以上の住民が汚染地域に残っている。白ロシヤの町Gomelでは1986年から1994年までに甲状腺癌（Schilddrüsenkrebs）の罹病例が100倍に達した。ロシヤの原子物理学者たちは1994年現在の見積りとして，旧ソ連邦の領域に住む人々はチェルノブイリ惨事による放射能汚染のため，2003年までに1,500万人が死ぬだろうと発表している。

しかもソ連邦解体後のウクライナ共和国では，エネルギー不足のため国内需要電力の7パーセント余を事故をまぬがれたチェルノブイリ原発の他の原子炉によってまかなっている。それも第4号炉と同じRBMK-Reaktorで，IAEAが今日世界中でもっとも危険度が高いと見ているものである。本来は1993年までに運転停止の予定であった。またIAEAの検査では20万トンのコンクリート，鋼鉄からなる被覆部分が現在脆弱化し，第二のコンクリート被覆工事が計画中である。

では以上の叙述によって概略が明らかになったチェルノブイリ原発事故は，Wolfの作品の中でどのように描き出され，どのような意味を与えられたであろうか。

まず作者自身の現実体験は，テクスト自体が反映するように，東ドイツ（当時）で得られたもので，チェルノブイリの事故現場にあって消火作業に献身したり，放射線障害の人々の治療に当たったり，あるいは強制疎開の指揮をするという直接的，第一次的な活動から得られた体験ではなかった。だからこの作品は，いうなれば，隣家の火災のとばっちりを食い，類焼のおそれがあったため防火の準備に忙しかった人が後になって火災の恐怖を語っている趣きがある。Wolfにとってチェルノブイリ事故は，人類の自己破壊への衝動が具体化したものであったろうが，現実生活の上では放射能汚染による生鮮

③ F. 373ページ，379ページ

食料品の不足や欠乏が問題になった程度であり，すぐさま生命の危険に曝されるというインパクトを感じたわけではない。従って彼女がメクレンブルクの一寒村に独居する初老の女流作家を主人公に仕立てて，その一日を描いた作品は，たとえば，シェフチェンコという監督が自分の生命と引き替えに撮ったチェルノブイリ原発事故の記録映画④のごとき圧倒的な迫力を持ちえない。いや，少なくとも表面的には人々の興味を強く惹くところがない。

しかし，おそらくWolfの眼目は，事実あるいは題材の特異さによって読者の関心を得ようとすることではなく，刺戟的な事実の世界を根底で動かしている人間の妄執もしくは「盲点」をえぐり出すことにあったと思われる。いずれにせよ，Wolfは自分のチェルノブイリ体験が第一次的な直接性を欠いていることを充分知りながら，なおかつ，自らの体験の意味を問う形で真摯に努力したようである。

では，Wolfの作品に入っていこう。

副題（Nachrichten eines Tages）が示すように，この作品はあの日，つまり，事故の当日に伝えられた，あるいは耳に入ってきた様々な次元の報道，噂話，電話での会話などに，主人公とおぼしき初老の女流作家が反応し，その都度経験する感情の起伏，心理的動揺，そして折々の断片的思索の跡を，いわば，その一日の拡大された詳細な日記として――少なくとも日記の記述なら，起きてから寝るまでの時間によって一つのまとまりを得る――記録したものと言えるであろう。つまり，彼女が自らのチェルノブイリ体験を言語化するために選んだ道は，告白とはいわないまでも，自分の経験にいくらかのフィクションの覆いをかけただけで，そのまま率直に語ることであった。「私」という一人称で登場する主人公，あるいは日記の記録者は，繰りかえしになるが，当時の東ドイツはメクレンブルク州の田舎に独居する初老の女流作家で，原子力発電とは関係がなく，またその知識も皆無に近い普通の市民

④ B. 166ページ，193ページ

という設定である。この女性は作品執筆のかたわら庭に花や野菜を植えて田園生活を楽しんでいたが，その快適な日常生活が，「あの日」突如として根底から揺るぎ出し，彼女の心の中に存在の危機感が芽ばえる。彼女は狼狽し，驚愕し，ヒステリックに反応し，そして次第に核エネルギー利用を推進する人間たちの背後に潜む人間性の欠陥，人間精神の盲点へと思索の触手を伸ばしていく。作中の他の登場人物はたしかに作者の断り書き通り，作者が頭の中で考え出した架空の人物であると受け取ってもよいが，主人公自身はWolfその人がフィクションの衣をまとった姿であろう。彼女は作中で，「ロンドンにいる年老いた友で，私と同姓の婦人」のことに触れているが，この婦人とは，かつてドイツからイギリスへ亡命したCharlotte *Wolff* のことで，作者Christa *Wolf* は図らずも作中の「私」と自分が同一の存在であることを洩らしたかに見える。勿論これはWolfの技巧であり，意図した漏洩ともいうべきもので，自分でありながら同時に自分ではない，というフィクション独特の自由を獲得する手段であろう。

さて，この作者でもあり作者でもない「私」には，作中で53歳とされた技術者の弟がおり，偶々「あの日」朝7時から遠く離れた都市の病院で，脳腫瘍の外科手術を受けることになっていた。「私」には，このように私的な範囲でも「あの日」は心配の種があり，決して他の日と代替可能な任意の一日ではなかった。この肉親への心配とサンヨーの小型ラジオから刻々と報ぜられるチェルノブイリ原発事故のニュースとが交互にからみ合って，時間を進行させ，緊迫感を深めていく。しかしWolfは，この二つの心配事を頭の中で何度も蒸し返し，反芻するという心理描写を作品の柱としながらも，日常の習慣化した行為の叙述を省いたりはしない。むしろ，「朝起きて，顔を洗って……」式のルティーンを克明に記録しながら，その日常性のさ中に頭をもたげる不安や恐怖の感情を連想の形で点描していくのである。それは作者が日常性という堅固な習慣が人間を護る砦であると観じているかのようでもあり，また，その堅固な砦さえ徐々に土台から削り取っていくほど原発事故の脅威が大きいと語っているようでもある。ともあれ，日常性の描写，記述は

主人公が朝起きて夜寝るまでの時間をうまく埋めていく。ただし，この作品は「あの日」（先にも述べたが，チェルノブイリ原発事故は事故当日に発表されたのではなく，三日後に世界中に知れ渡った）の体験を，素朴に，いわば生地のまま振り返って再現しているのではない。「私」は，事故が発生してから，それが人間生活に及ぼす重大な作用，影響についてマスメディアに教えられ，自らもその情報をもとに考え始め，いろいろと憂慮した挙句，もう一度「あの日」を振り返るのである。いまや事態の意味を悟った目で「あの日」一日の習慣的行動を改めて検討し直す。従って，作品の中で「私」が何も知らない白紙の状態にあって事故のニュースに驚愕するという素朴な反応が描かれるのではない。実例を見よう。冒頭で「私」は，これからいつの日か，桜の花がパッと満開するようなことがあっても，桜の花が爆発したように咲き誇った（die Kirschbäume sind explodiert）とは考えないつもりだと言う。「爆発する（explodieren）」という言葉が，チェルノブイリの爆発事故とわかちがたく結びついてしまったのだ。しかも永い厳しい冬が終ったこの年の春は，まさに「緑が爆発している」（des Grün explodiert）という表現がもっとも適切であると思われるのに。続いて「私」は，はるか未来の彼方にあって，自分の創作活動のごく初期から，自分の行動，自分のあり方を注意深く観察しはじめた審判部局（Instanz）があると言い出し，その裁きの場に向って，「私」は今から先はもう何ものにも束縛を感じないようにするとほのめかす。つまり，今後は何でも自分の好きなようにやる，就中，やりたくないことには，もう一切手をつけないというのである。さらに「私」は語を継いで，このやや不明確な表現を敷衍する。すなわち，はるかに遠い未来にあって，これまで自分のすべての行動の描く線が目指していた到達目標がこなごなに爆破されてしまった，原子炉内部の核分裂物質と共に溶融しながら消滅するところであった云々。これはまことに曖昧な，持って回った表現であるが，おそらくは神とか絶対者とかいった存在を示唆しているのであろう。「私」は，このことを注釈して，未来から自分を見守る「あの目差し」であり，それ以上のものではないと言う。結局，ここで取りあげられた「審判部局」にせよ，

「到達目標」にせよ，いずれも，「私」が若い時期に自らの行く手を導くものとして心に決めた人生の命題，人生を意義あらしむる規矩を意味しているものと解釈できよう。してみると，「私」にとってはチェルノブイリの原発事故と共に，人生の意義，人生の目的が消滅したことになる。勿論，„Instanz“ なる表現は，「私」が信頼してきたにせよ，外的な制約を含み，あるいは「私」が「労働者と農民の国」で感じ取り，心の奥深くしまい込んでおいた怨恨が言わせた言葉かもしれぬ。しかし，いずれにせよ，「私」なる初老の女流作家にとってチェルノブイリは従来の生活信条の終りを意味したわけで，「あの日」全体の結論となっている。この日記めいた作品の展開は，先取りして提示された結論を裏付ける形となる。そこで日常生活のルティーンが綴られていくが，その個々の描写が絶えず原発事故と結びつき，連想が作品進行の重要な技巧となっている。

「私」の日常茶飯事を簡単に追いながら，連想がどのように働いているかを見てみよう。

「私」は「あの日」の朝，ほとんど毎日のように繰り返すことながら，自分の家の青いものが芽生えたばかりの庭に侵入してきた隣家の白色レグホンを追い払うのに懸命だった。庭の菜園に播いた種子をほじくり出して食べてしまう鶏には，「私」は毎度ながら腹を立てているのである。この鶏どもの唯一ましな点は，「私」がシッ，シッと声を挙げて追うと，ちょっと戸惑った様子を見せるが，ともかくも「私」が追い込もうとした隣家の庭へ戻っていくことである。「お前たちの産む卵はお前たちのところに置いておけばいいのよ」と「私」は意地わるい喜びを感じながら心の中で呟く。おそらく「私」の菜園を荒しにきた鶏たちが，いつかその場に卵を産んだことがあったらしい。主人公の日常生活は，このようにごく平凡なシーンで始まるように見える。しかし，すでに述べた通り，日常のルティーンの描写は素朴な，表面通りの意味を伝えるだけではない。原発事故を経験した者の批判的な眼で，「あの日」のことをあらためて顧みているのだ。白色レグホンの侵入は，チェルノブイリから流れ込んだ放射能を示唆するし，鶏が主人公の庭に産卵することは放

射能汚染をほのめかしている。とすれば,「お前たちの卵はお前たちのところへ置いておけ」という考えには，チェルノブイリ原発事故を惹き起こしたソ連に対する非難が含まれていることになる。「私」の1日の始まりは，早くも原発事故へのルサンチマンと絡みあった巧みな導入といえよう。

次の一節は,「7時。弟よ，貴方の現在いる病院では時間厳守で仕事が始まりますよ。貴方はもう30分前に鎮静剤の注射をうたれましたね……」とはじまって，この日，脳腫瘍の外科手術を受ける弟の様子が「私」の脳裡に次々と描かれていく。弟の安全を祈る願いが，あたかも「エネルギー放射」のように弟のもとに届くことを願っているうちに,「私」の思念はまたもや放射能汚染へ戻る。「貴方が眠っているうちに，私の方は次々と新しい言葉を覚えているの」と「私」は心の中で麻酔に眠る弟を思い浮かべ．„kontaminieren“（汚染する）を呟く。

これ以降，この日の時間の推移は「私」の日常生活と弟の手術進行段階が交互に描き出される形で示される。そしてこの日の午後1時に「私」のもとに電話連絡が入り，弟の脳手術が無事に終わり，その後順調な経過をたどっていることが知らされると，この日の緊迫感を高めていた部分が消滅し，後はもっぱら「原子力発電」をめぐる主人公の断片的な想念の展開となり，やがて次第に，人間の心の中に潜む野獣性，あるいは知性の中の盲点に焦点が絞られていく。こうした日記記述の構成からみて,「私」の弟の手術終了までが，原発事故と弟の病気という二極の間に揺れ動く「私」の内面を，日常性の時間軸にそって，効果的に描き出しているかに思われる。

今，簡単にそこまでの段階を順序に従って並べてみると，まず，放射能汚染がいつかはヨーロッパにも起こるのではないかと「私」がこれまで内心でひそかに恐れていたことが語られる。

> Ja, habe ich eine Person in mir denken hören, warum immer nur die japanischen Fischer.　Warum nicht auch einmal wir.⑤

---

⑤ 用書11ページ

つまり，内心ではまるっきり危険を予想しなかったわけではないが，その危険がどんな性質のものか，事故のニュースを聞くまで，まったく見当もつかなかった。これが主人公の率直な告白で，原発事故の報道が彼女に大へんなショックを与えたことが裏書きされている。朝のシャワーを浴びながらサンヨーのラジオに耳を傾けていた「私」は，俄かに雨後の筍のごとく輩出した「核問題専門家」が次々と相矛盾する見解を発表するのに呆れかえる。地下水の汚染についても，炉心のメルトダウンの可能性についても専門家たちの意見は二派に分かれ，一致点がない。炉心溶融の話から「私」は，かつて子供の頃，弟と一緒にビール瓶に塩酸を詰め，密封し砂山に穴を深く堀って埋めたことなど思い出す。子供なりの „China Syndrome“ の想い出である。そのうちにラジオのインタビューに出た若い核問題専門家が，自分の子供たちに，その日は生乳を飲ませず，葉っぱのままのほうれん草や緑色サラダ菜などを食べさせない，また，公園や砂場で遊ぶのをやめさせるよう妻に指示したと語るのが耳に入る。「とうとう事態はそこまで来たのか」と誰かが「私」の耳のそばで言うのが聞える。話しているのは誰かと考えてみれば，それは「私」自身の独り言であった。主人公の注意力もどこか散漫になっており，感情も幾分不安定になっているらしい。

「私」は次に朝食の準備をする。コーヒーをいれ，卵を茹でる。そのコーヒーの香からふと脳手術で患者が臭覚を失うこともあると聞いたことを想い出し，弟の身を案ずる。さらにライ麦の粒まじりのパンを手に取ると，いったい Nuklide（核種）はどんな具合に穀物の中に蓄積されていくのだろうかと思ってみる。このように，ごく平凡な朝食時にも「私」の想念は，弟の脳手術についての危惧と原子炉の故障から生まれた恐怖との間を駆けめぐるのである。「私」は自分に言い聞かせる。今，冷蔵庫から取り出した卵は，あの事故の前に鶏の体内でつくられたものだし，その鶏も放射能に汚染していない草や穀物で養われたのだ。だから食べても安全である云々。なにか不安定で，ややもするとヒステリーに墮しそうな精神状態のようである。その時，台所の窓より空を見上げると，空はまあ，なんと輝くばかりの紺碧だ。あの青い

空を放射能はどんな法則に従って拡散するのだろう。このような具合に，日記の主人公は日常のルティーンをこなしながらも二つの心配事から抜け出せない。彼女は郵便局へ出掛ける途中でWeiß老人と出会う。彼が戦後ようやく復員してくると，妻は死んでおり，自分の小屋の中にいたのは見も知らぬ戦災孤児の少女一人だった。後にその少女と結婚したWeiß氏は，その後今日まで40年間家畜の世話をして暮してきた。彼はいわば時の流れには無関係な，従って原発事故など一切意に介さぬ頑健で固陋な人物として，「私」の住む寒村の点景となっている。郵便局長のGutjahr氏は老齢で身体障害者。原発事故なぞ一切問題にせず，いわば「なるようになれ」の心境にあり，ラジオから間断なく流れてくる原発事故のニュースにも，ほとんど耳を傾けない。今挙げた二人の老人は，いずれも「私」とはまったく異なるタイプの人間らしく描かれ，「私」の心理的動揺がかなり偏頗なものであることを示唆している。家に戻った「私」は，なにか落ち着かれぬ気持ちから，親しい人の声を聞きたくなり，ベルリンに住む娘に電話して，いろいろ話し合う。この時の「私」は娘の二人の子供の祖母ということになる。娘は都会に住んでいるだけに，原発事故については母よりも多くの情報を得ており，放射能汚染が子供たちに及ぼす悪影響を憂慮して夜もろくに眠れない。不眠のため彼女の声が荒れてザラザラした感じである。もう万事手遅れになった，という情報を得た娘は，ベッドに入って横になっている二人の子供の様子をとても見ておられないのである。それが不眠の原因なのだ。ここで親子のやり取りが入る。

娘―それ以上にまともな不眠の原因があると言うなら，お母さん，教えてよ。

母―いや，そんなものなんかありませんよ。でもね，別の側から見れば……

娘―お母さん，もういいから何も言わないでちょうだい。お母さんだって，こんなひどい事が起きた本当の理由をちゃんと知っているはずだわ。それとも違うの。あいつら，何一つきちんと学ばなかったのだから，あいつら皆，病気なのよ。

このやり取りの後「私」は改めて反省する。「本当は私たち全員がこの恐るべき事故のことを，もっと徹底的に考えてみるべきではなかったのか。私た

ちは，大抵なるべく手間のかからぬ，面倒のない生活を望んでいる。だから，もっともらしく壇上にあがって，自分の語る言葉が真実そのものなりといった調子で滔々と論ずる人々や，白衣をまとっていかにも専門家めいた挙動をする人々の言を無条件に信じたがる傾向がある。万人が皆一致した考え方をし，他人の言には反対したがらない。それを恐ろしいと思うことが肝要なのに，そうはしない。だから私達は結局のところ，少数の者の権力渇仰，傲慢，仮借のない好奇心，そして独善性を盛り立てているのではないか」。

娘との電話の後，「私」は庭に出て，これまで3日間も降雨がなく，すっかり固くなった土壌を鋤や鍬でなんとか耕して，サラダ菜などの種子を播く。その間中，「私」はいつの間か小声で「奴らが悪い」と罵っている。その奴らとは誰か，どうしてそんなに立腹するのかと彼女は自問する。そして「奴ら」は，あの恐ろしい技術，危険の多い技術の発展を推し進めている連中，つまり，原子力利用の専門家，研究者たちのことだと気付く。どうやら「私」の心の中に批判されるべき相手が少しずつ姿を現わしてきたようである。

次いで，「私」のところへベルリンの友人で，作家でもある女性から電話が掛かってくる。そしてその女性は思いがけず「私」への好意を打ち明けるのである。なにか唐突の感をまぬがれぬが，事故によって喚起された特殊な心理状態が通常の抑制を緩めたのであろう。その後，「私」は書きかけの原稿を続けようと机に向かうが，その原稿はすっかり蒼ざめ，色を失い，全く空しく思われるのであった。自分の仕事の意義も価値も事実の重さに押しつぶされて――勿論，この打撃も動揺する「私」の心理状態から生まれた一時的なものに過ぎない――「私」は「消費協同組合」(Konsum) の販売所へ買物に出掛ける。売り子の話では，村の人々はその日注文した通りに牛乳を引き取りに来ているらしい。「ひどい，ひどい。なにもかも全くひどい状態です。でも私たちなんか，どの道どうしようもないんですよ。まさか，飲んだり，食べたりを止めるわけにもいかないし」と売り子は庶民の諦めをつぶやく。そうかと思うと，やはり販売所に姿を現わした男が，SF めいた妙な迷信を語り，人類を地球外部から護ってくれる生物，精霊のような存在 (Geist-Wesen) が

いよいよ地球滅亡の時が迫ったら必ず干渉してくる，つまり，救助にやってくると自分の確信を伝える。人間が自らを危急存亡の域にまで追い込むはずがないという根拠のない願望が，SF ファンの若者の口を通して語られ，「私」を取りまく人々のチェルノブイリ反応が客観化されて描き出される。

買物からの帰り道で，「私」は隣人の Plaack に出会う。彼は天気がよいので，じゃがいもの種芋を貯蔵所から取り出して植え付けたいと願っているが，もし放射能を含んだ降雨があったらどうしようと迷っているところだった。「私」は，それはやらない方がいいと忠告する。ここから「私」の関心は俄かに雨に惹きつけられ，子供たちの登校時に降雨があったら，学校も休ませなければならぬ，とか，これからは「雨降り」の歌も唄えなくなるのではないかと妙に情ない気持ちに駆られる。放射能をもたらす降雨では，

Es regnet, Gott regnet,
Die Erde wird naß.
Da freun sich die Kinder,
Da freut sich das Gras.

などと唄えるわけがない。こんな不条理なことがどうして起こるのかと思い悩んでいる「私」の脳裡に，突然，奇妙な想念が浮ぶ。この世界を創造し，支配している神のかたわらに，その全く反対の神，神に逆らう神 (Gegengott)がいるのではないか。見知らぬ，未知の神だ。さもなければ，こんな理不尽な世界が出現するはずがない。しかし「私」は直ちに，そのような奇怪な幻想めいた思いつきが自分の心の奥底より登ってきたことに愕然とする。一瞬ではあるが，自分の頭蓋骨で覆われたものの中から，こんな怪物が出現したのだ，いや自分の魂の内部にこのような深淵があるのだと考えた「私」は，そろそろ日常ルティーンの領域から離れて，原子力発電所をつくり出す人間たちについての考察，あるいは見る人の立場によっては，感情的な思弁へ移ってゆく。

やがて手術が成功して健康体に戻った時の弟に原発事故の説明をしようと「私」はメモのような文章を書き始める。「先週土曜日，現地時間1時25分，

第4号炉の構内の機械室に火災発生。原因はいつくかの不運な予測しえぬ事情が重なり合ったこと。物理学者たちの証言では，せいぜい1万年に1回起こり得るとされた事態が今，現実に出来した。1万年がこの日1日に融けあってしまった。確率の法則は改めて，私たちに法則を真剣に受けとめるよう教えたのである。物理学者たちは依然として，私たちには理解できない言葉で喋べり続けている。1時間あたり15ミリレムのフォールアウト（Fall out）とは一体何のことだ……」。主人公はこのような調子で，自分たち一般市民がまったく聾桟敷におかれていることに，はかない抗議の声をあげ，次第に核エネルギー利用に携る専門家，科学者，技術者に不信の念を抱きはじめる。殊に核エネルギー管理に従事する者たちが，今回のような大惨事が生じても，なかなかその危険性を明示する言葉 „Katastrophe“ を使用せず，逆に事態の重大さを専門用語のバリアーによって糊塗すべく „GAU“ なる表現を頻発する。これは „größter anzunehmender Unfall“ の略語で，原子炉建設時に，その施設，機構の程度を基準として，想定しうる限りでは最大規模の事故という意味で，原子炉の安全性を事前評価する場合の一段階を示す。日本語では重大事故（major accident）と称している段階である。

午後1時，弟の脳手術が終了し，経過はまったく正常との連絡が弟の妻よりある。この時から，焦慮のあまり硬く手を握りしめて手がこわばったり，あるいは，自らもはっきり意識せぬ間に食器を叩きつけようとしたりする「私」の神経過敏，不安定が消えて，次第に理性的な考え方をするようになる。今や「私」はじっくりと落着いて，チェルノブイリ原発事故の根本的な原因となる科学技術の進歩のスピード，それを担っている人々の精神のあり方に注意を向け，一歩一歩思索を深めていく。しかしChrista Wolfは経験を積んだ作家らしく，徒らに抽象的，概念的な文章を書き綴らず，常に今度は病床にあって手術後の回復を待つ弟と心の中で対話するという形で具象的な段階から大きく逸脱しない。だから，「昼食後，食器を洗い，布巾を手にしながら，気付いてみると「私」は声を張りあげて『歓喜の歌』を歌っていた」という描写が出てくるのである。

疲れた「私」はベッドに横になるが，弟の手術成功で興奮しているのか，眠れない。想いはいつか病床の弟の許へはしり，自らもベッドに入っていることを思うと，かつて子供の頃，メクレンブルクの田舎町で弟と共にチフスにかかり，二人並んで避病院のベッドに横たわっていたことを想い出す。あの時，チフスの熱で二人とも髪の毛が抜けたのだった。この子供の時のチフスの想い出が，実は伏線になっている。この日の夕方「私」の庭に現われたある家族が，昔，戦争の終わった後，自分の妹がチフスで死に，この庭に埋葬された云々と語るのを聞いた「私」はひどく不機嫌に，また，つっけんどんに応対することになるが，それは過去の不愉快な想い出から反射的に出てきた態度であったのだろう。本人にも理解できぬ反応であるが，どこかしら心の奥底に子供の時期を嫌悪するものが潜んでいるようである。そうかと思うと，今度は放射能汚染圏のことが「私」の念頭に浮かぶ。いったい何故危険境界線が事故現場より30キロメートルのところに引かれているのだろうか。何故29キロメートル，あるいは33キロメートルではいけないんだろうか。このように「私」の想念は次々と変転し，自分の考えや感覚がいつかしら「散文の範囲」を越えてしまったように感ずる。

と，この時，「私」は自分の想像力のスイッチが切れたら，くよくよ思い悩まなくてもよいのだがと願うが，とたんに，私達の上にも，自分たちの上にもこんな危険を招きよせた連中は，きっと想像力遮断スイッチを所有しているに違いないと想念が飛躍する。「それとも連中はスイッチを切る必要がないのだ。私たちのような（彼らと）違う人間はいつもこの先どうなるかの想いに苦しめられるが，連中はそんな先の心配なんかない代わりに，脳の中に盲点があるのかしら」⑥。

「私」はそんな連中のことを想像してみる。彼らは20歳から25歳位までの間に，徹底的に人生の愉しみ，快楽の想い，充実感などの記憶を脳に詰め込

⑥　用書67ページ

み，後になると追憶中枢を電流で刺戟するだけで，再び人間的な欲求が充足されたと思う人々であり，おまけに工業技術の先端をいく技師たちである。つまり，脳の内部に実際に体験したかのような満足感をかきたてる追憶電流さえあれば――すなわち，人生の代替物があれば――「現実」生活の死ぬほどの退屈さにも対抗できると信ずる人々。

次にどうしてこんな世の中になったのかと「私」は自問し，自分たちの「罪」を考える。「私」たちは発言が多すぎたのではなく少なすぎた。これっぽっちの僅かな発言，それもオズオズと，しかも時宜を失した発言。どうしてか。それは，自分たちに確信がなく，不安だらけで，希望が欠けていたからだ。否，希望があったためでもある。とすると，偽りの希望は人の心をあざむくから，勇気をなくさせる絶望と同じ結果をもたらす。このように「私」はあまり稔りのない自己批判に耽る。

「私」の考えは一見はっきりした方向性がなく，トピックからトピックへ蝶のように飛び移っているようだが，「人間の脳の中の盲点」という着想が生まれて，ようやく人間内部の非人間性の追求が「私」の思索の目的に据えられたらしい。

彼女は人間の発展の歴史を振りかえって，すでに農耕文化の時代から殺すことと発明することがわかち難く結合していたと見る。すると『創生紀』で語られる Kain の弟殺しは，同時に農業従事者としてなんらかの発明と結びついていたのだろうか。それとも彼は文明をつくり出した人なのか。彼女の関心は，人間がどうして同類を殺すのかという点に向けられ，「人間が下位にある集団を根絶し，自らを選択（もしくは淘汰）の道具に仕立てあげたこと，そしてその選択は人間の頭脳の急速な発達を促した」という想定を否定しえないのである。

彼女の疑問はつきない。自分の同類を攻撃するミュータントが人間の進化を推進するのか。それは，人口過剰を回避するためには，同種属間の殺し合いが認められるということなのか。はたまた，数量に制限のある殺害は，生物学的に支持しうることか。あるいは，そのような過程を経て，人間は自分

自身の敵対者になってしまったのか。

ここで「私」はあまり理屈っぽくなったと感じたらしく，一転して自分の男友達らしい人物が，この危機に自分の傍にいてくれないと愚痴めいた感想を書き留める。そしてその慰めてくれる男友達がいないから，つい妙な雑誌に手を出してしまうと断りながら，『スター・ウォーズの科学者たち』(„Die Wissenschaftler von »Star Wars«“) という雑誌記事を紹介する。この科学者たちの異名は „Star warriors“ (星間戦士)で，まずその生活ぶりが報告される。すると「「私」はとたんに心の中にシグナルが点じた」と言う。

その記事によれば，桁はずれに優秀で，まだまったく若い男たちの一団が――自分たちの脳の中のある種の中枢に生じた超大活動意欲につきあげられて――悪魔と盟約を結んだのではなく，工学技術問題の魅惑に魂を委ねたというのである。読んでいる「私」は，思わず「今でもまだ，あのお人好しの悪魔がいたら，世の中はずっとましだったのに」といかにもドイツ文学の作家らしく溜息をつく。「私」は記事を読み進むうちに，自分がさきほど追憶電流に頼る若者などと空想したことが，もはや空想どころではなく，現実はとうにそれを追い越していると知った。

「星間戦士」の異名をもつ一群の超優秀頭脳集団は都会を遠く離れ，隔離された居留地で暮し，女性も子供も友人もいない孤独な生活を送り，自分の仕事の他はなに一つの楽しみがなく，厳格きわまる保安規則や防諜規則にも従順に従っている。彼らは「私」が先ほど空想したような追憶電流による擬似的生活など必要としない。「私」は自分の世間知らず，ナイーブさを笑いたくなるほどである。

ここではっきり看て取れる事実は，彼ら若者たちが必要とするものは，彼らの感情生活を完全に吸い尽す偽のきずな (Pseudo-Bindung) だけだということである。「でも，どうしたっていうんですか。何一つ問題なんかありませんよ。コンピューターって代物，いったい何のためにあるっておっしゃるのですか」。

こうした一風変わった青年たちが，この地へ到着してリバーモア星間戦争

研究所に（「入獄した」とは言いたくない）入所したとき，もう彼らの人生は終わっていたのであろう。ここで「私」は，心の中で病床の弟に向かい，この青年たちがこの世で理解できるのは，コンピューターだけで，その他のものや人はまるっきり理解できないと説明する。自分の両親も，兄弟姉妹も全然理解できない。仮に妻や子供がいても理解できないことは同じ。「ねえ，あそこには女性が一人もいないのよ。こんな胸苦しくなるような事実が，あの若者たちがコンピューターを熱愛する理由なのかしら。それとも（女性がいないための）結果かしら。」

彼ら高度に訓練された優秀な頭脳の持ち主は，日夜をわかたず左脳を駆使し，懸命に研究所の目標であるレントゲン・レーザー光線の開発に励んでいるが，人間としては未発達な，半ば子供じみた人々である。昔日，戦に敗れて奴隷となった者たちが，ガリー船に鉄鎖でつながれ，ひたすら櫂をこいだように，この若者たちは愛すべきコンピューターに結びつけられ縛られている。食事時になってもまともなものを食わず，ピーナッツバターを塗りつけたパン，トマトケチャップをかけたハンバーガー，それに冷蔵庫から取り出したコカコーラといったありあわせで空腹を満たすだけ。

彼らの生活は，将来起こり得る宇宙空間の核戦争に備え，アメリカの安全を護るため，原子力利用のレーザー光線を実用化することに捧げられているのだ。彼らは一体何者なのだ。あの真理探究に憑かれたかつての科学者たち，私たちの心になじんでいる伝説的な科学者たちを「正当に，合法的に」受け継ぐ者なのであろうか。それとも私生児か。不当にもかの偉大なる真理探究の徒を自分の親だと主張する奴等なのか。この時，「私」の心の中のシグナルが一段と明るく点滅し，なにかしら déjà-vu の感じにとらわれる。それは，正確に3年前，アメリカ西海岸カリフォルニア州バークレーの映画館で見た „Star Wars“ 第2部の „Star warriors“ たちであった。そう，あの研究所のコンピューターに憑かれた若者たちとこの映画はつながっていると「私」は確信する。あの時「私」のちょうど後に座っていた若い黒人女性が映画のクライマックスになると，急に立ちあがり，„Kill him! Kill him!“ と絶叫し

た。その追憶とともに「私」は直観的に理解したのである。あのリバーモア研究所にアメリカでも最優秀の頭脳を持つ若者たちを惹き寄せた魅力は,「アメリカの安全」などという幻想ではなく，まさに「死の吸引力」(Sog des Todes) とも称すべき「虚無」(Nichts) であることを。脳の中の盲点が，若者たちのヒューマニティが全面的に開花するのを妨げ，人生に向かって自分の心を解放するよりは，コンピューターによって計算可能な原子力の研究に没頭することをよしとさせているのだ。いったい，これは人間の心の中に巣くう破壊の欲望，あるいは，そのヴァリエーションなのか。虚無の中に吸い込まれてまで，徹底的に物理世界の根源に至ろうとする欲望は，文化のどのような発展段階で人間精神に侵入したのか。それとも太古から連綿として生き続ける本能の働きなのであろうか。

ところで作品の構成からみて,「私」の思索の紆余曲折は彼女の1日が終わるまで続くはずだし，それも直線的な理論の構築ではない。いわば折りに触れての着想を積み重ねるという方法で,思想を展開しているので,ここで「私」の「この日」の思索を要約する必要があろう。ただし，この作品はあくまで日記の形式に従って時間の流れを記録しており，思索の展開に終始するわけではない。「私」が雑誌記事に触発され，悲観的な思いにとらわれた後の時の経過は，簡単に示すとほぼ以下のようなことになる。主人公は「日本の平和の花」と呼ばれる植物の植えかえをする。その後，急に運動したくなり，古い自転車に乗って村はずれの変電所まで行き，さらに隣村へ向かい，その帰えりに，村人に親しまれている森に入ってしばらく過去の追想に耽る。自宅へ戻ってみると，すでに触れたように，見知らぬ人々が彼女の庭に昔埋葬した子供のことを想い出して，その跡を見に来ている。「私」はその人々の妙に押しつけがましい態度――つまり，戦後の苦労は自分もさんざん経験した。それなのに「私」がその見知らぬ人々に好意のある応対をするのが当然だと前提してかかる態度――に腹を立てて彼らを追い返す。しかし苦い味の残る振舞として「私」はいつまでも忘れられない。なお，読者の立場からも彼女の応対は不可解で，この作品の中で唯一の不透明な記述であり，原発事故と

どう結びつくのか，あるいは「私」の心の盲点によるものなのか一向に要領を得ない。家の中に入ってから，その日の便りに目を通す。その中にロンドン在住の老婦人からのものがあり，「私」は刺戟を受け，彼女の著書を読んで自分の疑問（人間の破壊欲求の根源）を解く鍵を得ようとする。次いで窓辺に立って落日の光景を眺め感銘を覚える。(ただし，読者には彼女が何故沈んでいく太陽にそれほど感傷的になるのか不明である)。「私」は人間の目の盲点について考え込み，さらに飛躍して暗闇の心のことを脳裡に思い浮かべる。(どうやら，最後に取りあげる Joseph Conrad の „Heart of Darkness“ を先取りしたらしい)。彼女の思索の矛先は，自らの職業にもっとも大きな意味をもつ言語に向けられ，いろいろと思弁が続く。夜になって漁師の妻である Umbreit 夫人が現われ，鰻をくれ，その料理法も教えてくれる。酢で煮つめて保存するのであるが，「私」は教わった通りに実行する。頭をチョン切られ，皮の剝がれた鰻が，床のタイルへ落ちて体をくねらせ，はねるのを見てぞっとするが，「私」は歯を食いしばって最後まで調理を続ける。これは弟の手術終了後ではもつともリアルな描写であろう。上の娘から電話があり「盲点」について会話する。夕食後，のんびりとワインを飲みながらテレビを見る。今回の原発事故をめぐるパネルディスカッションで，立派な服装の紳士たちが専門家の権威を身辺にただよわせつつ，自分たちの（おそらくドイツのことであろう）原子炉がいかに安全かを委しく説明する。聴いている「私」も司会者も，自国の原発はまったく安全なのだと思い込むほど説得力がある。しかし，司会者が最後に駄目押しするように，原子炉の安全性を確認しようとすると，その専門家の答は絶対的な安全の保証はないというものであった。そして原子力技術開発の現段階では一定の危険も覚悟せねばならぬと教えられる。いわばペテンにかかった「私」はカンカンになって怒る。

さて，寝る前に台所で蟻の通る路を発見した主人公は酢酸をつかって蟻退治をする。入浴後，ベッドの中でコンラッドの『闇の奥』を読みはじめ，作者の体験からにじみ出した表現の真実性に強く打たれる。夜中，大きな声と咆哮で目を覚ます。彼女の耳に遠くの方から „A faultless monster!“ という

叫び声が聞こえた。ずいぶん長い時がたって「私」は，咆哮が自分の口から出たと気付く。窓から見上げる真暗な深夜の空に，彼女の亡くなった母の大きな写真が貼られていた。彼女は悲鳴をあげる。「この地上を去っていくことになったら，どれほど辛いことでしょうね」と彼女は心の中で弟に語りかける。ややセンチメンタルな締めくくりである。

さて最後に「私」なる人物の「あの日」の思索の内容を簡単にまとめてみよう。人間が種として他の動物の間で発展してくる過程で，脳の急速な発達成長があり，それが人間をして地上の征服者たらしめたが，同時に選択，淘汰という生存競争の中で同種のものを殺すという性質が生じた。これが文明開化した現代でも人間の脳の中に「盲点」として残っており，危急存亡のときにその牙をむき出す。危険が完全に排除できないことが明白であるにもかかわらず，敢えて原子力エネルギーの利用を推進する人々，またその動きを黙認し，かつ実際に起こった災害を甘受する一般大衆の中にこの盲点が存在する。従って「私」の人間観は，作者 Wolf が作品のモットーの一つとして掲げた Konrad Lorenz の次の言葉に要約されている。すなわち，

> Das langgesuchte Zwischenglied zwischen dem Tier und dem wahrhaft humanen Menschen sind wir.⑦

私たち現代の人間は20世紀が幕を閉じようとしている現在も，依然として「真にヒューマニティのある人間」の域に達せず，獣性を完全に克服していない。今日，世界のあちこちで起こっている紛争，内戦の類は，民族の独立とか，信教の自由を大義名分に掲げているが，「私」のいう「盲点」によってつき動かされていることは疑問の余地がない。人間は未完成の知的動物でしかなく，真の道徳的規矩によって制御されない知的探究に没頭し，自らの住む地球をやがて無人の荒寥たる惑星に変えようとしているかに見える。

人間の言語がこのことと関連しているのは明らかである。そもそも人間と

---

⑦ 用書7ページ

いう種の特権ともいえる言語は，他の動物に対抗して，人間の独立性を確保する手段であったが，同時に同種の中にあっても別な言語を話す人々に対しては，「汝，殺すべからず」の禁忌を消す力がある。人間のような生物の中のある種（Art）が一旦（言葉を）話しはじめたら，もうそれは止められぬ。言語とは，試しに使うとか，実験するために使うなどと用途を限定して受取ることの出来ない（神からの）贈物である。さて，一度手に入った言語は私たちが本来，動物として持っている本能の働きの多くを抑圧してしまう。そのため現在の私たちは，再び必要が生じたからといって，その本能の働きが戻ってくると期待することは出来ない。つまり，私たち人間は言語を（神の手から）受け取ると同時に，自分たちを究極的に動物の世界より閉め出してしまったのだ。いわば太古の反射器官の働きを備えてこの地球上に出現する乳呑児は，二・三週間以内にその働きを脱ぎ棄てねばならない。それも正常となるため，つまり人間という特殊な地球生物に発達していくためである。その太古の器官に代わって，人間の生存闘争の陣頭指揮をとるのは新皮質の前頭葉である。人間の文化は前頭葉の生産物で，言語はその継続手段にして前提条件なのだ。と説きつつも「私」の心にはしっくりこない何かがある。それは不信である。自分自身への疑惑である。一般市民よりも言語に対して敏感に反応する「私」の脳は，まさしくこの言語という仲介手段によって，この（自分の生きている）文化の価値を生み出すべくプログラムされているに違いない。とすれば，「私」はおそらく根本的な答を自分で出したくなるほど自分の心を動かすような質問は出来ないはずだ。言語の光明は，「私」が言語を知る以前，薄明の中にあったかもしれぬ内面世界の全領域を暗闇の中に押し込んでしまった。ただ「私」にはその記憶がない。どこか一箇所で，否，多くの箇所で我々人間は，野性や非理性や動物性を文化の中にまで取り込まざるをえなかったのだ（ところが，文化はそもそも抑え難きものを抑えるために創造されたはずなのだ）。我々の中の蜥蜴が尻尾を振りまわし，我々の内部の野獣が咆哮する。我々人間は，醜く顔を歪めて自分の兄弟に掴みかかり，兄弟を殺す。Abel を殺した Kain のように。その後で我々は頭の中から脳を引っ

張り出し，その中の野生の部分を探し出し焼いて捨てたいと願う。

さて，そのような言語のあり方を考えると，たとえば作家として，あくまでも精密に，ますます明確に読み取れるべく，どこまでも誤りなく対象を表現するために生命を賭けるなどということは，そもそも努力に値するだろうか。となると，それがどれほど見事なものであれ，言語表現への嘔吐感が起こり，それはやがて言葉そのものへの嫌悪・嘔吐となり，遂には自分自身を唾棄すべきものと感ずる憎悪に至る。

次に言語使用の重要な一面である「書く」という行為の意味について述べておく。文章を書くという出来事は，これまで肯定的な意味合いでいろいろ論ぜられているが，実は，その出来事（書く人を主体とすれば，「行為」となる）は常に人間を掴み取る，その力の圏内に引きずり込むという人間支配の作用がある。人々は描写され，記述されるとその文章の関係者となり，自分が観察され，糾弾され，類別され，誤認され，さらに事態が悪化すると，裏切られ，しかもその表現が成功した場合には，常に他の人間から遠く隔てられていると感じざるをえない。こうした文章の暴力に対抗する手段は沈黙を守ることしかないが，そうなると悪は外部から内面へ移し変えられる。つまり，他の人々に対するよりも自分に対するいたわりが少なくなるので，またもや自己欺瞞ということになってしまう。

以上のような人間言語不信論が今や作家である「私」を深く，深く絶望感の陥穽へ引きずり込んでいく。この初老の女流作家は，友人の自伝に触発されて，作家の存在も社会の中の一つの役割にすぎず，全面的な自己表白は，そもそも言語の機能から見てほとんど不可能だと考えている。彼女は言う。「ものを書きながら私たちは，ますますもの書きの役割に徹しなければならないが，同時に役割をはずれて，私たちの仮面を取りはずし，私たちのまぎれもない本物の自分をかすかに浮かびあがらせねばならない。それも，私たちが自分で望むと望まざるとにかかわらず，社会のコードに従った文章の背後で，こっそりと」。

この作品の最後に至って「私」は，19世紀の帰化英国人作家 Joseph Conrad

の『闇の奥』(„Heart of Darkness“) に感服している。彼女は「体験に裏打ちされた真実の描写力」に感嘆し，この作家がいかにして，手段とか効果といった概念に振りまわされず創作できたかと自問する。この『闇の奥』の表面上の主人公，あるいは報告者は，まさにConradその人で，人間の悲哀というものを知っており，ただ頭の中で考えただけでなく，実際にあの文化――彼自身もそこに所属している文化――の真直中にある盲点へ入り込んでいったのだ。闇の奥に君臨する狂気の男Kurtzは，まさしく「私」が人間の脳の中に見出した盲点に屈服した，野獣性の虜となった人間であった。「私」が「実際の体験」を云々するとき，作者Wolfはおそらく，自分の作品――チェルノブイリの原発事故の衝撃を精神的に克服しようとした試みであろうが――に事実の重み，体験の間接性があることを自覚していたに違いない。彼女は何度も「人間の脳の中に潜む盲点」に言及するが，多くの読者はそれを興味深いテーマと見るだけで，その真実性には幾分なりとも不信の念をもって対処するであろう。作品前半が平凡な日常ルティーンの記述でありながらも共感を呼び起こすのは，基本的に体験の裏打ちがあったからで，その真実性において後半部分に勝っている。

さて結論的に言えば，Christa Wolfがチェルノブイリの原発事故を一つの文学作品の中に取り込もうとした努力は，少なくとも，作品前半部分に関して成功している。彼女が原発事故の現場に居合わせたというような直接体験，つまり効果的な素材を持たず，もっぱら放射能の拡散によって間接的に影響を蒙った「東ドイツ」の一寒村での体験，見聞，観察にのみ依拠して原発事故の重い意味を表現したことは流石である。しかし彼女は現象の背後に潜むものを求めるあまり，やや描写や記述の具象性を離れ，思弁に耽り，想像を先行させてしまった嫌いがあり，この作品は彼女自身のための備忘録，自分だけの記録と思いたくなる。敢えていえば，これはChrista Wolfの「私記」(private papers) と呼んでもよいかもしれない。

最後に筆者が，この作品を取りあげた理由を述べておくと，かのチェルノブイリ原発事故が起きた当時，筆者は西ドイツ（当時）のザールブリュッケ

ンに滞在中であった。つまり，その時，東ドイツ(当時)に住んでいたChrista Wolfと大差のない地理的条件下にあって，ほぼ同程度の放射能汚染を体験したことになる。彼女の作品に語られている通り，新鮮な牛乳やキャベツ，ほうれんそうなどの葉菜類があっという間に商店から姿を消し，放射能レベルが人体に危険がなくとも，食料の面では1カ月近く，豆の缶詰や長期保存牛乳で我慢するという「被害」を蒙った。つまり自分自身で体験して知っているあの危機的状況が，ドイツ文学の現役作家の筆によってどのように表現されるのか，というプリミティブながら切実な好奇心があったのである。

用書：Christa Wolf „Störfall　Nachrichten eines Tages". 3. Aufl. Mai 1987. Sammlung Luchterhand, April 1987. Verlag Luchterhand Darmstadt und Neuwied

参考文献

A．R. P. ゲイル他『チェルノブイリ ── アメリカ人医師の体験 ──』，岩波新書50，51（上，下），1988年

B．田中三彦『原発はなぜ危険か ── 元設計技師の証言 ──』，岩波新書102，1990年

C．集英社：『情報知識 imidas』1989，集英社，1989年

D．„Geschichte der Deutschen", Insel Taschenbuch 1481, Insel Verlag Frankfurt am Main 1993

E．„Chronik des 20. Jahrhunderts", Chronik-Verlag Dortmund 1982

F．„Harenberg Lexikon der Gegenwart Aktuell '95", Harenberg Lexikon-Verlag, Dortmund 1994

※　なお下線は筆者による強調である。